

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2692600279
法人名	医療法人 育成会
事業所名	ぐるーぷほーむ 森の家 桜ユニット
所在地	京都府福知山市夜久野町直見4番地の7
自己評価作成日	令和4年12月20日
評価結果市町村受理日	令和5年6月15日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

毎日の生活の中で家事全般(調理、洗濯、掃除など)を入居者と一緒に行うことで、やりがい、役割を持ち生き生きと生活できるように努めている。家と同じように畑で農作物を植えたり、収穫したり、たけのこ堀りや紅葉見学、梅干しを漬けたりと季節を感じながら過ごせるように努めている。季節の食材を使用し、一緒に調理やおやつを作り、時々、鍋やたこ焼きなどテーブルを囲みながら楽しめるように工夫をして過ごしている。季節を感じられるようなレクリエーションや作り物をしたり、アルバムと一緒に作ったり、お手玉やけん玉、あやとりなど思い出を大切にしようとする取組みも行っている。管理栄養士により、入居者の状態に合わせた食事ができるように努めている。新型コロナウイルス感染予防のため地域の方との交流はしていないが、駐車場を魚屋やスーパーの移動販売に場所提供している。米やパンは地域から購入している。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaisokkensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&UjyosyoCd=2692600279-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 きょうと福祉ネットワーク一期一会
所在地	京都市右京区西院久田町5番地
訪問調査日	令和5年2月24日

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当該事業所は、山あいの住宅地の中にある、廃校したグラウンドの跡地に建てられた2ユニットのグループホームです。医師である理事長が地域の役に立ちたいという思いから市町と話し合い開設されたといいました。理事長が医師、管理者は看護師である強みを活かして医療、介護の両面から安心して暮らせるグループホームです。建物は、中央に中庭があることで中庭に面した食堂、居間、エントランス(地域交流スペース)が、明るく開放的な空間になっています。その周囲にある居室もどこの時間で光が入るように設計されています。1日のスケジュールの中に利用者の好きな作業、希望する作業をその人のペースで組み込み、理念「自分らしく生き生きと」の実践に繋がっています。新型コロナウイルス感染症の渦中の開設から3年目を迎え、コロナ禍でできることを工夫されつつ、コロナ禍後には地域交流スペースの活用などの意向を伺い、実行していられることに期待したい事業所です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員が目につきやすいようにスタッフルームと職員通用口に理念を掲示。全体会議のはじめに理念を読み、職員に周知し、入居者のケアにつなげていけるように努めている。	法人理念をもとにオープニングスタッフで作成した事業所理念は、スタッフルームと職員通用口に掲示し、全体会議の始めに読むなど共有している。利用者の1日のスケジュールの中に好きな作業、したいことをその人のペースで入れ理念「自分らしく生き生きと」の実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	新型コロナウイルス感染予防のため接触を避けている。感染者数が少ない時は散歩等を行っている。施設駐車場を移動スーパー、魚の販売業者に提供し、地域の方が集える場所としている。米やパン等は地域から購入。昨年、一昨年は近所の方から自家栽培のイチゴの提供をして頂いた。	事業所内の草引きで、近隣の方から声かけがある。地域の美容師の訪問で散髪をしてもらっている。通信を運営推進会議の際に配布し自治会長から地域の方へ配布してもらっている。魚屋やスーパーの移動販売を駐車場の一角で行うことで、地域の方が集える機会になっている。コロナ禍が落ち着いたら地域交流スペースを活用したい意向がある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	新型コロナウイルス感染予防のために地域の方に講習会等は実施していない。地区の区長に運営推進委員の構成員になっていただき、暮らしの状況が理解してもらえるように情報提供している。天気の良い日は草引きや日光浴の姿を近所の方は見守られている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナウイルス感染予防のため運営推進会議は開催していない。2ヶ月に1回書面で状況報告を行い、意見をサービスに反映している。	コロナ禍中での開所であったことから、開所以来2ヶ月に1回書面で状況報告を行っている。メンバーは、各ユニットの家族各1名、地域住民の代表者(夜久野地区の自治会長)、知見を有するもの(司法書士:市の推進会議参加者)、市職員、地域包括支援センター、民生委員と他職種で行われ、書面で得た意見やアドバイスはサービスの向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の担当者を運営推進委員の構成員とし、意見交換できるようにしている。メールで情報提供をもらっている。	市の担当課職員が運営推進委員会メンバーになっており、事業所の実情やサービスの取り組みなどを把握してもらっている。書類について電話で質問したり、研修情報のやり取りやマスクの提供があるなど協力関係が築けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束、高齢者虐待の施設内研修会を令和4年7月15日と令和5年1月の年2回予定。新人オリエンテーションで身体拘束について説明している。 身体拘束委員会を3ヶ月に1回開催している。 現状、身体拘束は0件。	身体拘束等の適正化のための指針、身体拘束に関するマニュアルを策定し、施設内研修の定期開催や新人オリエンテーションでの説明などで周知している。スピーチロックについては、スピーチ指針を策定し身体拘束委員会で周知している。尊厳のチェックリストを作成し、虐待や身体拘束について自己チェックをしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束、高齢者虐待の施設内研修を令和4年7月15日と令和5年1月の年2回予定。新人オリエンテーションで身体拘束、高齢者虐待について説明している。 職員間でコミュニケーションを図りながら、虐待が見過ごされないように注意し防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	未実施。資料をマニュアルに綴じ、必要時に活用できるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に説明し、同意を得ている。変更時にも説明し、同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	令和3年9月に家族に、令和3年12月入居者にアンケートを実施し、サービスに活用。入居者については再度、令和4年1月に調査を実施した。アンケートの内容については運営推進会議に報告。家族の代表2名を運営推進委員の構成員とし意見や家族の思いを確認している。	家族にアンケートを年1回実施し、入居者にも職員の聞き取りによるアンケート調査を実施している。運営推進会議に家族の代表2名が委員として参加していることから意見を聞き取っている。職員は担当制で利用者の日々の希望を聞いて、メモ書きなどで共有している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	施設内で毎月全体会議を行い、理事長も参加。11月に職員の目標、意見要望を書面にて確認し、サービスや業務改善につなげるようにしている。	月に1～3回開催される理事長も参加する全体会議が非常勤職員を含む職員の意見を聞く機会となっている。人事考課の際に目標と意見を提出してもらっている。口頭で聞いたことは引き継ぎノートで周知している。レクレーションは担当者が次年度のアンケートをとって企画している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	11月に職員の自己評価と要望、希望などを書面にて確認し対応している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内研修は法定研修と職員の希望を確認し、年間計画を立て実施している。施設外研修は希望を確認したり、施設側から声をかけたりしながら参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	オンラインで老人保健施設と研修会を実施している。施設外研修に参加し、職員間で交流できる機会を設けている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者の訴えを傾聴しながらサービス、ケアに努めている。入居申し込み相談時に本人も含めて施設見学をすすめている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込み時に傾聴し、その後の対応の仕方を相談している。入居時にサービス計画を説明しながら、再度希望の確認をしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の心身の状況を確認し、対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	レクリエーションや体操、家事等の日常生活動作を一緒に行ない入居者との関係を築いている。調理や畑など一緒に行うことで入居者から教えてもらうことも多い。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	新型コロナウイルス感染予防のために面会はガラス越しで対応している。面会時等に本人の様子を伝えるようにしている、毎月、入居者の写真の空白部分に入居者から家族宛にコメントを記入して郵送している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	新型コロナウイルス感染予防のため家族以外の方の面会は制限している。趣味や習い事、仕事など昔のことを話題にして話をするように努めている。	コロナ禍のためユニット間で交流している。年賀状のサポート(数人)や手紙、電話のサポートを行っている。地域の方に季節に応じて来訪してもらい、たけのこの下処理や梅干し作りなど昔ながらの作業に取り組んでいる。お墓詣りや美容室利用の希望は、コロナ後の目標になっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	体操やレクリエーション等できるだけ全員で行えるように支援している。別のユニットとも交流し、話が入居者間でできるように心掛けている。多目的ホールでピアノを弾かれると他の入居者が話しかけたり、歌を歌ったりと交流が自然にできるような環境にしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他施設に入所、病院に入院された場合、必要に応じて様子を確認している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	畑、散歩、家事、ピアノ演奏など声かけをしながら、入居者が行いたいことが実施できるように努めている。職員間でも確認をとりながら希望や思いを把握できるように努めている。	日々の会話の中で昔の話や楽しみなどを聞き取るようにしている。困難な場合は、様子を見たり、動作を見るなどして、いつもの笑顔かどうかを確認している。知り得た情報は申し送りノートに記入し、職員間で共有している。利用者の希望する作業を1日のスケジュールの中にその人のペースで組み込むように努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	話の中で情報を得たことはサービスにつなげられる様に努めている。入居前には家族のわかる範囲で聞き取りをするように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	共同生活の中でも入居者のペースで生活ができるように心身の状態や能力を把握し、好き嫌いを考慮しケアにつなげていけるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	医師も含め定期的にカンファレンスを行い、関係者と話し合いながら計画作成をしている。計画をもとに家族に意見・希望を確認している。	定期的に理事長(医師)、介護職、看護師、管理栄養士、事務員(介護職兼務)の参加でカンファレンスが行われている。利用者本人の意向は担当職員が希望をそれとなく聞き取り、家族にも聞き取るようにしている。その意向を計画作成者と担当者が事前に話し合い、カンファレンスで他の職員の意見も反映させて作成し、家族の同意を得ている。アセスメント、モニタリングは半年に1回行っている。状況を見て1~3カ月の場合もある。介護ソフトほのぼのを活用しているが、身体評価については事業所独自のを担当者が記入している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	経過記録、24時間シートに記入し情報共有できるように努めている。申し送りやカンファレンスを活用し、実践や介護計画の見直しができるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズに対応できるように支援、サービスに努めている。特に食に対する希望に対して提供できるように心掛けている。今年度はたけのこ、はったい粉、鹿肉、柿など提供をおこなった。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の美容師に訪問にて散髪をしてもらっている。市の広報紙や学園だよりなど提供してもらっており、興味のある方は読まれている。夏には打ち上げ花火を施設内から楽しんで見ておられた(地区の有志主催)。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	理事長がかかりつけ医として往診にて対応。状態変化があった時には連絡をしている。専門医の診察が必要な時には、家族の意向を確認しながら調整している。	理事長が医師であることから、かかりつけ医として週2回(火・金)往診している。検査や専門医へは、家族で対応してもらっている。医師間の情報共有は、診療情報提供書や手紙のやり取りをしている。職員へは会議で共有している。コロナ禍のため歯科の往診は対応していない。口腔ケアはマニュアルを作成して職員で対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	常勤1名、アルバイト1名が勤務している。日常の情報については申し送りで施設内の看護師に伝わるようにしている。状態変化時には連絡し、相談している。勤務外の時には電話で情報交換をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、付き添いや看護サマリーを準備するなど情報提供をしている。医師からの情報もかかりつけ医(理事長)を通して情報提供され、治療経過の把握も行きやすい。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状態変化に伴うプロセス等を作成。カンファレンスや申し送り等で情報共有している。家族に説明を行い方向性を相談するように努めている。 入居時に延命治療の希望等を確認するようにしている。事業所でできることを常日頃から考えていく必要がある。	「看取りに関する指針」を作成し、家族の同意を得ている。スタッフルームに、「重度化した場合の対応に関する指針」、「ぐるーぷほーむ看取り介護の手順確認票」、「状態変化に対するプロセス等」を設置し、状態の変化に応じて再度確認している。医師(理事長)の判断により家族へ方向性を説明し、意向の確認をしている。年に1回看取り研修を行い、報告会も行っている。ユニットを超えて実践研修を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時のマニュアルをスタッフルームに置き、確認できるようにしている。 バイタル測定は毎日の業務で行い、急変時には対応できるようにしている。応急処置の研修は未実施、状態変化時に実践の中で対応の仕方を説明、指導するように努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	令和4年11月に避難訓練を実施。令和4年3月、9月に避難経路の確認を実施。	消防署の指導のもと年に2回、夜間想定で避難訓練を実施している(避難経路は昼間に確認)。地域の災害訓練には、コロナ禍のため参加できていない。近隣の方が消防団員であることからコロナ後には消防団に推進会議に参加してもらう予定をしている。備蓄は3日分、自家発電機を設置している。BCPIは担当者を決めて模索中。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	声掛けの姿勢、声掛けの場所や声のトーン等配慮するよう心掛けている。	年1回研修を実施し、職員アンケートも実施している。入浴、排泄の支援場面における言葉かけは、小さい声や合図で行うようにし、失禁時はわからないようにトイレや部屋に誘導している。相談事は聞こえないように配慮している。一人になりたい時はソファで過ごしてもらうなど配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で声掛けをして本人の希望を確認しながら対応するように努めている。誕生会のケーキは選択できるように工夫をしている。調理や掃除などは本人がしたいと思うことを声掛けするように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	決まった日課はありますが、本人の調子で変更したり、話をしながら家事等の作業分担をしたりするように支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴時に洋服を選んだり、洗顔時や入浴後に化粧水等を使ったりすることで身だしなみやオシャレをができるように支援している。令和4年の敬老会では、いろんなアクセサリを準備し、選んでもらい身につけて楽しんでもらった。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	地元食材や季節に応じた材料を使用し、楽しみながら食事をしてもらっている。毎日の生活の中で調理、食事の準備、盛り付けなど一緒に行っている。調理に携わることで若い頃の日常に近い体験ができるように支援している。時には、サンドイッチや巻き寿司、たこ焼き、お鍋、おやつなど、他ユニットと合同で話をしながら調理を行うこともしている。	地域の食材を使ったり、季節感のあるメニュー(たけのこ、節分の巻きずしなど)を調理したり、お正月はお鍋や寿司の出前などで食事を楽しんでもらっている。普段は1、2人でしたい人が料理や片付けなど何らかは関わってもらっているが、月に1回程度大勢でテーブルを囲んで、できる範囲内で料理づくりを実施している。常勤の管理栄養士と連携をとり状態に合わせたメニューが提供できている。(らくらくパンなど)	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体重の変化と摂取量を栄養状態の指標として栄養管理に努めている。食事摂取量が減った、食べられなくなった入居者に対しては管理栄養士と相談しながら食事形態の工夫や栄養補助食品を提供している。1日の水分摂取量1000mlを目標に声掛けや飲み物を工夫し対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	入居者の状態や状況に応じて毎食後に声かけ、誘導、ケアを行っている。毎回、義歯の洗浄も行っている。口腔ケアの留意点、注意点を作成し、スタッフに周知しマニュアルファイル綴じて閲覧できるようにしている。状態に応じて口腔ケア用品(舌ブラシ、スポンジブラシ、タフトブラシなど)の選定している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居者の状態に応じてトイレ誘導、見守り、介助を行っている。	24時間シートを活用して排泄パターンを把握しトイレへの誘導、トイレでの排泄を支援している。夜間は、センサーライトや鈴の音(布団に付けた小さな鈴)で確認し、誘導するようにしている。おむつの使用は2人で、声掛けに配慮して確認している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	入居者の体調に合わせて体操、水分摂取量の調整や内服により排便コントロールができるように努めている。必要な方については24時間シートを活用し、排便の確認を行っている。食事は食物繊維を意識し野菜を多く取り入れている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回入浴を実施している。声かけをして入浴を嫌がられた場合は、時間を変更したり、次の日に声掛けしたりして対応している。暖簾や時に入浴剤を使用し楽しめるように努めている。状態に合わせて、リフト浴を活用している。	週に2回、月・木の午前中(4:30頃まで)を基本としていますが、体調や拒否の方には火・金と水・土を予備日として、時間も午前→午後→翌日と臨機応変に対応している。季節を楽しめるように入浴剤を使用しています。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間は個々に応じて対応している。午睡や夜間就寝時に声掛けや19時頃に温かい飲み物を提供している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者の薬を保管しているポーチに薬の用法、作用の説明書を入れ把握できるようにしている。薬の変更があった時には、申し送りや薬のファイルで情報共有できるようにしている。注意が必要な時にはコメントを記入し把握に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の好みにより家事等の役割分担を行い、張り合いが持てるように支援している。趣味や好きなことの情報収集を行い、茶道や卓球、歌など楽しく生活ができるように努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	新型コロナ感染予防のため、外出行事は控えている。施設敷地内の畑や駐車場を活用し、天気の良い日は畑仕事や草引きや日光浴を行う等支援している。また、他者と交わらないように気をつけながらたけのこ堀見学や紅葉鑑賞に車で外出を行った。	コロナウイルスの感染に配慮して、もみじ鑑賞やたけのこ堀り、梅の実取りに出かけたり、近隣の自販機までジュースを買いに行っている。日当たりのいいエントランスで外気浴をしたり、中庭でのピザ焼き、駐車場の奥にある菜園で草引きや芋ほりをするなどコロナ禍でできることを工夫して外出支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭の管理は家族としている。新型コロナ感染予防のため、買い物等の外出は行っていないが、時に近くの自動販売機で飲み物を購入する支援を行っている。レクリエーションの中で魚に金額を記入し、計算やお金の話をするなどの楽しみながら対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	毎月、写真の空白部分にコメントを記入してもらい、家族に郵送している。友人と手紙のやり取りをされている方もいる。家族から電話があると対応し、聞こえにくい方については仲介することで話ができるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者と一緒に作成した季節感のある手作りカレンダーや飾り物、広報紙などを食堂や多目的ホール飾るようにしている。多目的ホールにソファや椅子、テーブルを置き、リラックス、レクリエーション等くつろいだり、楽しんだりできるように工夫している。又、ピアノを入居者やスタッフが弾き、その周囲に集まり一緒に歌を歌って過ごす時間もある。	共用部の設えは木のため、温かみがある。建物の中央に中庭が設置され、中庭に面した食堂、エントランスは、日当たりがよく日中のほとんどを過ごされている。エントランスでは、ピアノが設置されており、音楽を楽しまれたりしている。居間やエントランスのソファで本を読まれるなど、一人ひとりが居心地よく過ごされるように工夫されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂のテーブルの配置、食席を状況に合わせて工夫するようにしている。多目的ホールや居間にソファを置き、多目的ホールの本棚の横にソファを置くことで一人静かに過ごせるように工夫をしている。ピアノも一人で弾いて楽しまれている時もある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に使い慣れた物を持参してもらえるように説明している。タンスや好みものを本人や家族と相談しながら配置するなど工夫をしている。配置については本人と話をしながら整理している。犬を飼っておられた方は、家族が犬のぬいぐるみ持参され、それを抱えて寝ておられる。開設前に新型コロナが流行し、家族が居室まで入り、生活空間を一緒に作ることは実現できていない。	居室は、どこかの時間で光が入るように設計されていることから明るい空間となっている。室内灯は、暖色と白色が色の確認のため変えられるように工夫されている。コロナ禍の開設のため家族が居室内に入ることができていないので、使い慣れたものや好みものは、利用者と家族に相談しながら配置している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレ、浴室には手すりを設置している。トイレは分かりやすいように表示している。危険な場所を把握するために、職員に令和4年8月アンケートを実施。12月集計し、情報提供しながら対応を検討していく方向。歩行補助具は使用しやすいように設置場所を決めている。座位時の姿勢修正ができるように声掛けや座り直し、必要な方には座面の工夫を行うように努めている。		

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2692600279		
法人名	医療法人 育成会		
事業所名	ぐるーぷほーむ 森の家 桃ユニット		
所在地	京都府福知山市夜久野町直見4番地の7		
自己評価作成日	令和4年12月20日	評価結果市町村受理日	令和5年6月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&JkyosvoCd=2692600279-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 きょうと福祉ネットワーク一期一会		
所在地	京都市右京区西院久田町5番地		
訪問調査日	令和5年2月24日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

毎日の生活の中で家事全般(調理、洗濯、掃除など)を入居者と一緒に行うことで、やりがい、役割を持ち生き生きと生活ができるように努めている。家と同じように畑で農作物を植えたり、収穫したり、たけのこ掘りや紅葉見学、梅干しを漬けたりと季節を感じながら過ごせるように努めている。季節の食材を使用し、一緒に調理やおやつを作り、時々、鍋やた焼きなどテーブルを囲みながら楽しめるように工夫をして過ごしている。季節を感じられるようなレクリエーションや作り物をしたり、アルバムを一緒に作ったり、お手玉やけん玉、あやとりなど思い出を大切にするような取組みも行っている。管理栄養士により、入居者の状態に合わせた食事ができるように努めている。新型コロナウイルス感染予防のため地域の方との交流はしていないが、駐車場を魚屋やスーパーの移動販売に場所提供している。米

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当該事業所は、山あいの住宅地の中にある、廃校したグラウンドの跡地に建てられた2ユニットのグループホームです。医師である理事長が地域の役に立ちたいという思いから市町と話し合い開設されたといいました。理事長が医師、管理者は看護師である強みを活かして医療、介護の両面から安心して暮らせるグループホームです。建物は、中央に中庭があることで中庭に面した食堂、居間、エントランス(地域交流スペース)が、明るく開放的な空間になっています。その周囲にある居室もどこかの時間で光が入るように設計されています。1日のスケジュールの中に利用者の好きな作業、希望する作業をその人のペースで組み込み、理念「自分らしく生き生きと」の実践に繋がっています。新型コロナウイルス感染症の渦中の開設から3年目を迎え、コロナ禍でできることを工夫されつつ、コロナ禍後には地域交流スペースの活用などの意向を伺い、実行していられることに期待したい事業所です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員が目につきやすいようにスタッフルームと職員通用口に理念を掲示。全体会議のはじめに理念を読み、職員に周知し、入居者のケアにつなげていけるように努めている。	法人理念をもとにオープニングスタッフで作成した事業所理念は、スタッフルームと職員通用口に掲示し、全体会議の始めに読むなど共有している。利用者の1日のスケジュールの中に好きな作業、したいことをその人のペースで入れ理念「自分らしく生き生きと」の実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	新型コロナウイルス感染予防のため接触を避けている。感染者数が少ない時は散歩等を行っている。施設駐車場を移動スーパー、魚の販売業者に提供し、地域の方が集える場所としている。米やパン等は地域から購入。昨年、一昨年は近所の方から自家栽培のイチゴの提供をして頂いた。	事業所内の草引きで、近隣の方から声かけがある。地域の美容師の訪問で散髪をしてもらっている。通信を運営推進会議の際に配布し自治会長から地域の方へ配布してもらっている。魚屋やスーパーの移動販売を駐車場の一角で行うことで、地域の方が集える機会になっている。コロナ禍が落ち着いたら地域交流スペースを活用したい意向がある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	新型コロナウイルス感染予防のために地域の方に講習会等は実施していない。地区の区長に運営推進委員の構成員になっていただき、暮らしの状況が理解してもらえるように情報提供している。天気の良い日は草引きや日光浴の姿を近所の方は見守られている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	新型コロナウイルス感染予防のため運営推進会議は開催していない。2ヶ月に1回書面で状況報告を行い、意見をサービスに反映している。	コロナ禍中での開所であったことから、開所以来2ヶ月に1回書面で状況報告を行っている。メンバーは、各ユニットの家族各1名、地域住民の代表者(夜久野地区の自治会長)、知見を有するもの(司法書士:市の推進会議参加者)、市職員、地域包括支援センター、民生委員と他職種で行われ、書面で得た意見やアドバイスはサービスの向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の担当者を運営推進委員の構成員とし、意見交換できるようにしている。メールで情報提供をもらっている。	市の担当課職員が運営推進委員会メンバーになっており、事業所の実情やサービスの取り組みなどを把握してもらっている。書類について電話で質問したり、研修情報のやり取りやマスクの提供があるなど協力関係が築けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束、高齢者虐待の施設内研修会を令和4年7月15日と令和5年1月の年2回予定。新人オリエンテーションで身体拘束について説明している。 身体拘束委員会を3ヶ月に1回開催している。 現状、身体拘束は0件。	身体拘束等の適正化のための指針、身体拘束に関するマニュアルを策定し、施設内研修の定期開催や新人オリエンテーションでの説明などで周知している。スピーチロックについては、スピーチ指針を策定し身体拘束委員会で周知している。尊厳のチェックリストを作成し、虐待や身体拘束について自己チェックをしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束、高齢者虐待の施設内研修を令和4年7月15日と令和5年1月の年2回予定。新人オリエンテーションで身体拘束、高齢者虐待について説明している。 職員間でコミュニケーションを図りながら、虐待が見過ごされないように注意し防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	未実施。資料をマニュアルに綴じ、必要時に活用できるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に説明し、同意を得ている。変更時にも説明し、同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	令和3年9月に家族に、令和3年12月入居者にアンケートを実施し、サービスに活用。入居者については再度、令和4年1月に調査を実施した。アンケートの内容については運営推進会議に報告。家族の代表2名を運営推進委員の構成員とし意見や家族の思いを確認している。	家族にアンケートを年1回実施し、入居者にも職員の聞き取りによるアンケート調査を実施している。運営推進会議に家族の代表2名が委員として参加していることから意見を聞き取っている。職員は担当制で利用者の日々の希望を聞いて、メモ書きなどで共有している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	施設内で毎月全体会議を行い、理事長も参加。11月に職員の目標、意見要望を書面にて確認し、サービスや業務改善につなげるようにしている。	月に1～3回開催される理事長も参加する全体会議が非常勤職員を含む職員の意見を聞く機会となっている。人事考課の際に目標と意見を提出してもらっている。口頭で聞いたことは引き継ぎノートで周知している。レクレーションは担当者が次年度のアンケートをとって企画している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	11月に職員の自己評価と要望、希望などを書面にて確認し対応している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内研修は法定研修と職員の希望を確認し、年間計画を立て実施している。施設外研修は希望を確認したり、施設側から声をかけたりしながら参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	オンラインで老人保健施設と研修会を実施している。施設外研修に参加し、職員間で交流できる機会を設けている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者の訴えを傾聴しながらサービス、ケアに努めている。入居申し込み相談時に本人も含めて施設見学をすすめている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申し込み時に傾聴し、その後の対応の仕方を相談している。入居時にサービス計画を説明しながら、再度希望の確認をしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人の心身の状況を確認し、対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	レクリエーションや体操、家事等の日常生活動作を一緒に行ない入居者との関係を築いている。調理や畑など一緒に行うことで入居者から教えてもらうことも多い。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	新型コロナウイルス感染予防のために面会はガラス越しで対応している。面会時等に本人の様子を伝えるようにしている、毎月、入居者の写真の空白部分に入居者から家族宛にコメントを記入して郵送している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	新型コロナ感染予防のため家族以外の方の面会は制限している。趣味や習い事、仕事など昔のことを話題にして話をするように努めている。	コロナ禍のためユニット間で交流している。年賀状のサポート(数人)や手紙、電話のサポートを行っている。地域の方に季節に応じて来訪してもらい、たけのこの下処理や梅干し作りなど昔ながらの作業に取り組んでいる。お墓詣りや美容室利用の希望は、コロナ後の目標になっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	体操やレクリエーション等できるだけ全員で行えるように支援している。別のユニットとも交流し、話が入居者間でできよう心掛けている。多目的ホールでピアノを弾かれると他の入居者が話しかけたり、歌を歌ったりと交流が自然にできるような環境にしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他施設に入所、病院に入院された場合、必要に応じて様子を確認している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	畑、散歩、家事、ピアノ演奏など声かけをしながら、入居者が行いたいことが実施できるように努めている。職員間でも確認をとりながら希望や思いを把握できるように努めている。	日々の会話の中で昔の話や楽しみなどを聞き取るようにしている。困難な場合は、様子を見たり、動作を見るなどして、いつもの笑顔かどうかを確認している。知り得た情報は申し送りノートに記入し、職員間で共有している。利用者の希望する作業を1日のスケジュールの中にその人のペースで組み込むように努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	話の中で情報を得たことはサービスにつなげられる様に努めている。入居前には家族のわかる範囲で聞き取りをするように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	共同生活の中でも入居者のペースで生活ができるように心身の状態や能力を把握し、好き嫌いを考慮しケアにつなげていけるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	医師も含め定期的にカンファレンスを行い、関係者と話し合いながら計画作成をしている。計画をもとに家族に意見・希望を確認している。	定期的に理事長(医師)、介護職、看護師、管理栄養士、事務員(介護職兼務)の参加でカンファレンスが行われている。利用者本人の意向は担当職員が希望をそれとなく聞き取り、家族にも聞き取るようにしている。その意向を計画作成者と担当者が事前に話し合い、カンファレンスで他の職員の意見も反映させて作成し、家族の同意を得ている。アセスメント、モニタリングは半年に1回行っている。状況を見て1~3カ月の場合もある。介護ソフトほのぼのを活用しているが、身体評価については事業所独自のもので担当者が記入している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	経過記録、24時間シートに記入し情報共有できるよう努めている。申し送りやカンファレンスを活用し、実践や介護計画の見直しができるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズに対応できるように支援、サービスに努めている。特に食に対する希望に対して提供できるように心掛けている。今年度はたけのこ、はったい粉、鹿肉、柿など提供をおこなった。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の美容師に訪問にて散髪をしてもらっている。市の広報紙や学園だよりなど提供してもらっており、興味のある方は読まれている。夏には打ち上げ花火を施設内から楽しんで見ておられた(地区の有志主催)。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	理事長がかかりつけ医として往診にて対応。状態変化があった時には連絡をしている。専門医の診察が必要な時には、家族の意向を確認しながら調整している。	理事長が医師であることから、かかりつけ医として週2回(火・金)往診している。検査や専門医へは、家族で対応してもらっている。医師間の情報共有は、診療情報提供書や手紙のやり取りをしている。職員へは会議で共有している。コロナ禍のため歯科の往診は対応していない。口腔ケアはマニュアルを作成して職員で対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	常勤1名、アルバイト1名が勤務している。日常の情報については申し送りで施設内の看護師に伝わるようにしている。状態変化時には連絡し、相談している。勤務外の時には電話で情報交換をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、付き添いや看護サマリーを準備するなど情報提供をしている。医師からの情報もかかりつけ医(理事長)を通して情報提供され、治療経過の把握も行きやすい。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状態変化に伴うプロセス等を作成。カンファレンスや申し送り等で情報共有している。家族に説明を行い方向性を相談するように努めている。 入居時に延命治療の希望等を確認するようにしている。事業所でできることを常日頃から考えていく必要がある。	「看取りに関する指針」を作成し、家族の同意を得ている。スタッフルームに、「重度化した場合の対応に関する指針」、「ぐるーぷほーむ看取り介護の手順確認票」、「状態変化に対するプロセス等」を設置し、状態の変化に応じて再度確認している。医師(理事長)の判断により家族へ方向性を説明し、意向の確認をしている。年に1回看取り研修を行い、報告会も行っている。ユニットを超えて実践研修を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時のマニュアルをスタッフルームに置き、確認できるようにしている。 バイタル測定は毎日の業務で行い、急変時には対応できるようにしている。応急処置の研修は未実施、状態変化時に実践の中で対応の仕方を説明、指導するように努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	令和4年11月に避難訓練を実施。令和4年3月、9月に避難経路の確認を実施。	消防署の指導のもと年に2回、夜間想定で避難訓練を実施している(避難経路は昼間に確認)。地域の災害訓練には、コロナ禍のため参加できていない。近隣の方が消防団員であることからコロナ後には消防団に推進会議に参加してもらう予定をしている。備蓄は3日分、自家発電機を設置している。BCPは担当者を決めて模索中。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	声掛けの姿勢、声掛けの場所や声のトーン等配慮するよう心掛けている。	年1回研修を実施し、職員アンケートも実施している。入浴、排泄の支援場面における言葉かけは、小さい声や合図で行うようにし、失禁時はわからないようにトイレや部屋に誘導している。相談事は聞こえないように配慮している。一人になりたい時はソファで過ごしてもらうなど配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で声掛けをして本人の希望を確認しながら対応するように努めている。誕生会のケーキは選択できるように工夫をしている。調理や掃除などは本人がしたいと思うことを声掛けするように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	決まった日課はありますが、本人の調子で変更したり、話をしながら家事等の作業分担をしたりするように支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入浴時に洋服を選んだり、洗顔時や入浴後に化粧水等を使ったりすることで身だしなみやオシャレをができるように支援している。令和4年の敬老会では、いろんなアクセサリを準備し、選んでもらい身につけて楽しんでもらった。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	地元食材や季節に応じた材料を使用し、楽しみながら食事をしてもらっている。毎日の生活の中で調理、食事の準備、盛り付けなど一緒に行っている。調理に携わることによって若い頃の日常に近い体験ができるように支援している。時には、サンドイッチや巻き寿司、たこ焼き、お鍋、おやつなど、他ユニットと合同で話をしながら調理を行うこともしている。	地域の食材を使ったり、季節感のあるメニュー(たけのこ、節分の巻きずしなど)を調理したり、お正月はお鍋や寿司の出前などで食事を楽しんでもらっている。普段は1、2人でしたい人が料理や片付けなど何らかは関わってもらっているが、月に1回程度大勢でテーブルを囲んで、できる範囲内で料理づくりを実施している。常勤の管理栄養士と連携をとり状態に合わせたメニューが提供できている。(らくらくパンなど)	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体重の変化と摂取量を栄養状態の指標として栄養管理に努めている。食事摂取量が減った、食べられなくなった入居者に対しては管理栄養士と相談しながら食事形態の工夫や栄養補助食品を提供している。1日の水分摂取量1000mlを目標に声掛けや飲み物を工夫し対応している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	入居者の状態や状況に応じて毎食後に声かけ、誘導、ケアを行っている。毎回、義歯の洗浄も行っている。口腔ケアの留意点、注意点を作成し、スタッフに周知しマニュアルファイル綴じて閲覧できるようにしている。状態に応じて口腔ケア用品(舌ブラシ、スポンジブラシ、タフトブラシなど)の選定している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居者の状態に応じてトイレ誘導、見守り、介助を行っている。	24時間シートを活用して排泄パターンを把握しトイレへの誘導、トイレでの排泄を支援している。夜間は、センサーライトや鈴の音(布団に付けた小さな鈴)で確認し、誘導するようにしている。おむつの使用は2人で、声掛けに配慮して確認している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	入居者の体調に合わせて体操、水分摂取量の調整や内服により排便コントロールができるように努めている。必要な方については24時間シートを活用し、排便の確認を行っている。食事は食物繊維を意識し野菜を多く取り入れている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	週2回入浴を実施している。声かけをして入浴を嫌がられた場合は、時間を変更したり、次の日に声掛けしたりして対応している。暖簾や時に入浴剤を使用し楽しめるように努めている。状態に合わせて、リフト浴を活用している。	週に2回、月・木の午前中(4:30頃まで)を基本としていますが、体調や拒否の方には火・金と水・土を予備日として、時間も午前→午後→翌日と臨機応変に対応している。季節を楽しめるように入浴剤を使用しています。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間は個々に応じて対応している。午睡や夜間就寝時に声掛けや19時頃に温かい飲み物を提供している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者の薬を保管しているポーチに薬の用法、作用の説明書を入れ把握できるようにしている。薬の変更があった時には、申し送りや薬のファイルで情報共有できるようにしている。注意が必要な時にはコメントを記入し把握に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の好みにより家事等の役割分担を行い、張り合いが持てるように支援している。趣味や好きなことの情報収集を行い、茶道や卓球、歌など楽しく生活ができるように努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	新型コロナ感染予防のため、外出行事は控えている。施設敷地内の畑や駐車場を活用し、天気の良い日は畑仕事や草引きや日光浴を行う等支援している。また、他者と交わらないように気をつけながらたけのこ堀見学や紅葉鑑賞に車で外出を行った。	コロナウイルスの感染に配慮して、もみじ鑑賞やたけのこ堀り、梅の実取りに出かけたり、近隣の自販機までジュースを買いに行っている。日当たりのいいエントランスで外気浴をしたり、中庭でのピザ焼き、駐車場の奥にある菜園で草引きや芋ほりをするなどコロナ禍でできることを工夫して外出支援している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭の管理は家族としている。新型コロナ感染予防のため、買い物等の外出は行っていないが、時に近くの自動販売機で飲み物を購入する支援を行っている。レクリエーションの中で魚に金額を記入し、計算やお金の話をするなどの楽しみながら対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	毎月、写真の空白部分にコメントを記入してもらい、家族に郵送している。友人と手紙のやり取りをされている方もいる。家族から電話があると対応し、聞こえにくい方については仲介することで話ができるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居者と一緒に作成した季節感のある手作りカレンダーや飾り物、広報紙などを食堂や多目的ホール飾るようにしている。多目的ホールにソファや椅子、テーブルを置き、リラクセス、レクリエーション等くつろいだり、楽しんだりできるように工夫している。又、ピアノを入居者やスタッフが弾き、その周囲に集まり一緒に歌を歌って過ごす時間もある。	共用部の設えは木のため、温かみがある。建物の中央に中庭が設置され、中庭に面した食堂、エントランスは、日当たりがよく日中のほとんどを過ごされている。エントランスでは、ピアノが設置されており、音楽を楽しまれたりしている。居間やエントランスのソファで本を読まれるなど、一人ひとりが居心地よく過ごされるように工夫されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂のテーブルの配置、食席を状況に合わせて工夫するようにしている。多目的ホールや居間にソファを置き、多目的ホールの本棚の横にソファを置くことで一人静かに過ごせるように工夫をしている。ピアノも一人で弾いて楽しんでいる時もある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に使い慣れた物を持参してもらえるように説明している。ダンスや好みのものを本人や家族と相談しながら配置するなど工夫をしている。配置については本人と話をしながら整理している。犬を飼っておられた方は、家族が犬のぬいぐるみ持参され、それを抱えて寝ておられる。開設前に新型コロナが流行し、家族が居室まで入り、生活空間を一緒に作ることは実現できていない。	居室は、どこかの時間で光が入るように設計されていることから明るい空間となっている。室内灯は、暖色と白色が色の確認のため変えられるように工夫されている。コロナ禍の開設のため家族が居室に入ることができていないので、使い慣れたものや好みのものは、利用者と家族に相談しながら配置している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレ、浴室には手すりを設置している。トイレは分かりやすいように表示している。危険な場所を把握するために、職員に令和4年8月アンケートを実施。12月集計し、情報提供しながら対応を検討していく方向。歩行補助具は使用しやすいように設置場所を決めている。座位時の姿勢修正ができるように声掛けや座り直し、必要な方には座面の工夫を行うように努めている。		